

ハルビン市におけるロシア様式住宅に関する研究

—住まい方の事例的検討—

鳥 飼 香代子・朴 玉 善*¹
中 山 みつこ*²・岡 村 聡 広*³

The Study of Russian Houses in Harbin, China — A Case Study of Living Style —

Kayoko TORIKAI, Yushan PIAO, Mitsuko NAKAYAMA and Akihiro OKAMURA

Abstract

We will report on the Russian Houses in Harbin. Most of the Russian Houses in Harbin were built by Russians before Russo-Japanese War. Harbin was under the influence of Russia. After World War II, Chinese families used them. We will focus on this paper how to use and modify such the foreign and old style houses by Chinese people nowadays.

We investigated three types: the detached house, the dormitory and the apartment.

Key Words : Harbin, Russian Houses, Living Style

1. はじめに

本稿はハルビン市に残るロシア様式住宅の特徴と今日の住まい方を検討し、ロシア様式住宅が革命後の中国でどのように利用されてきたのかをまとめようとするものである。今日ハルビン市に存在する建築物の様式は、①西洋古典系様式、②ゴシック様式、③ビザンチン様式、④アール・ヌーヴォ様式、⑤アール・デコとモダニズム様式、⑥中国様式、⑦中華バロック、⑧シベリア様式、⑨イスラム様式、の9つに分類されている^{1)~5)}。そしてロシア人は①から⑤の様式で建設することが多かった。そこで本稿では①から⑤のスタイルを取り入れかつ、ロシア人が計画、建設した住宅をロシア様式住宅と定義する。ハルビン市におけるロシア様式住宅は戸建て、聯戸式住宅、集合住宅の三種類である。戸建て、聯戸式住宅は南崗区の西大直街、北京街、紅軍街、公司街、南四道街、平原街などを中心にかなり残存し、現在も中国人によって使用されている。また集合住宅は

動力区の民生路に多く残っている⁶⁾。とくに南崗区の住宅は1901~1910年までに建てられた住宅のためかなり老朽化が進んでおり、いつまで使用するかハルビン市政府によって現在検討中である。ロシア様式住宅は部分的な改築や区分け（一住戸に多世帯が居住するための）を繰り返しながら中国人の生活が営まれるように変容していると考えられる。また、今日の急速な経済発展は中国人の生活様式そのものも著しく変貌させている。

ハルビン市のロシア様式建築についての研究は、主に都市建設（日本の都市計画に近い分野）と建築デザインの分野で進んでいるが⁴⁾、住宅の研究についてはほとんどない。さらに住まい方においても同様である⁶⁾⁷⁾。

そこで本稿は住まい方に絞り、就寝、食事、団欒を中心とする生活行為が、狭い住戸の中でどのような優先順位を持って確保されているのか、設備や家具の保有はどうであったのかを、ハルビン市の南崗区（一戸建て）と動力区（集合住宅）にあるロシア様式住宅を対象に報告する。

なお、最近のハルビンの建築ラッシュには目を見ることがあるが、建築デザインの流行は「復古調」であるという⁸⁾。ハルビン市民の考えにある「復古調」とは①の西洋古典系様式や⑤のアール・ヌーヴォで

*1 前熊本大学教育学研究科家政教育専修 現在(株)熊本ワイン勤務

*2 熊本大学教育学研究科家政教育専修

*3 熊本大学教育学研究科家政教育専修

あることを、現代建築が示している。

2. 調査の方法

住まい方調査の期間は平成12年3月29日～4月7日の10日間である。ハルビン市の知人にロシア様式住宅の区域を紹介してもらい、事前交渉なしに住まい方調査を依頼した。その調査内容は住宅平面の採取、調査表によるヒアリング調査、主要な部屋の写真、ビデオ撮影である。調査の具体的内容は次のとおりである。

- ①住宅平面の採取（家具の配置、設備を含む）
- ②ヒアリング調査
 - ・家族について
 - ・住居について（建築年数および居住年数、所有形式、供給主体）
 - ・部屋の使い方（食事、団欒、接客など、寝室の使い方）と起居様式
 - ・住宅の将来（住み続けるかどうか）
- ③写真、ビデオ撮影
 - ・住宅の外観、台所の形態、居間、その他の居室、設備、家具その他

3. 結果及び考察

ハルビン市は、工業都市だけでなく黒龍江省の省都である。1898年に清国から鉄道建設権を得た帝政ロシアが、モスクワをモデルに計画したという中心部は、中国都市の中で最もロシア建築の影響を受けている。革命後の中国はロシア様式住宅の導入により住宅建設をスタートさせており、中国の住宅に最も影響を与えたといわれている。

次に、各事例について平面構成と住まい方についてみていく。家具については図面参照。考察は最後にまとめて行うこととする。

〈事例1〉（図1）

家族構成は父（43歳）、母（42歳）、娘（16歳）の3人家族である。祖父母も同じ南崗区に居住、父の姉2人は共に結婚し、1人は本市内、もう1人は上海市にいる。父と母は企業に勤める共働き世帯である。娘は高校生。

住宅は1945年に祖父の勤める国営鉄道から借りた、いわば社宅である。家賃は現在1か月45円である。この住宅は1909年に建てられたもので、第二次大戦後ロシア人から撤収し、国営鉄道の管轄下に入ったものである。住宅の面積は48㎡である。張り出した玄関のみが木造で、その他の部分はコンクリートと

煉瓦の混構造である。外壁もコンクリートと煉瓦で構成されており、2戸聯戸式住宅（連続式）である。床は板張りである。窓は木枠製で二重のガラス窓、外側に鉄の柵（泥棒よけ）がついている。この住宅は公室1室、私室2室と台所（炊事用で食事をする広さはない）で構成されている。

玄関から入って、左側は台所である。母が毎回食事を作る。食器、食べ物洗いのみならず洗濯も台所の水道で行う。右側は、現在は倉庫として使っている居室である。中には使われていないベッドや箱類、本や新聞、さらに冬の間の食料品（野菜等）がおかれている。次の公室は主寝室であり、その入り口に靴箱があって、そこで靴を脱ぎ入るとすぐに父母のベッドがある。食事、団欒、接客はここで行うし、その他生活のほとんどもここで行われているといえる。右側の入り口から入ると娘の寝室である。空いた壁際が存在しないほどに、衣類や棚、箱類が置かれている。起居様式は椅子座である。トイレと風呂がないので、公衆トイレ、浴場を使う。寒さの厳しくなる冬にこれは大変な負担と考えられるが、入居者から不満は出ていない。なお、ここの床に注目すると外との段差がほとんどない。雨が少ないこと、長い冬の雪や雪解け水は玄関から二重のドアで防衛しているためであろう。なお暖房はロシア人時代のペチカから、現在のスチームに代っている。これからもこの住宅に住み続け、居住権を子供に引き継いでほしいと願っている。

〈事例2〉（図2）

家族構成は父（73歳）、母（72歳）、息子（38歳）、息子の妻（36歳）の4人である。その他に結婚した娘は、本市内に住んでいる。父は国営鉄道を退職し、年金で生活している。昼間は2人も家にいて、家事や近所の年寄りたちと遊んで過ごす。息子夫婦は国営鉄道に勤めている。息子同居であり、職場も継承していることが分かる。親が勤めていた場合、既得権として職場も継承することは多いそうである。

住宅は、1945年に父が国営鉄道から借りた住宅である。家賃は1ヶ月40円である。この住宅は1009年に建てられたものである。かつてはロシア人一家族が住んでいた住宅だが、国営鉄道の管轄に入ってから5世帯分として使っている。従って過密居住は深刻である。玄関部分は木造で、入ると廊下があって、他の3軒の住宅部分があり、突き当たりが調査対象世帯の住宅部分である。この家族の住宅は私室2室と台所で構成されており、この家族が使ってい

る部分の面積は40㎡である。突き当たり大きな扉があり、その右側は父母の部屋、左が息子夫婦の部屋である。なお息子夫婦の部屋は、近年自力で改装している。廊下と部屋の段差はほとんどないが、靴の履き替えは行わない。食事を除いたほとんどの生活はここで行う。息子夫婦の部屋は、入り口で靴を履き替えているが、これは床掃除などの管理が簡単だからである。なお、玄関から右に曲がった角に3帖大の台所が4室並んでおり、各世帯が1室ずつ使う。従ってそれぞれの部屋と台所はかなり離れている。食事は母か息子の妻が作り、台所で食べる。洗濯や食器、食物洗いは台所の水道で行う。なおここ以外に水道はない。トイレと風呂がないので、公衆トイレ、公衆浴場を使う。ただし、夏は台所に付いているシャワーを使う。困った点は物置がないだけで、これからもこの住宅に住み続け、子供に引き継いでほしいと願っている。

〈事例3〉(図3)

家族構成は、祖母(65歳)、父(40歳)、母(35歳)、孫(10歳)、そして次男(現在、日本に留学中)の5人家族である。経済的基盤は祖母の年金と息子夫婦の就労である。次男は日本で自活していると推測される。祖母は昼間は家に居り、家事と墨絵の趣味を楽しみながら過している。孫は小学生。

住宅は1970年に祖父の勤めていた国営鉄道から借りた住宅であり、家賃は現在1ヶ月126円である。この住宅は公室2室、私室1室と台所で構成されている。面積は50㎡である。この住宅は事例2の一部である。この家族の住宅は事例2の玄関を使うのではなく、反対側の階段を上がってすぐのドアを玄関としている。このドアから靴を履き替えて入った場所は息子夫婦の寝室である。またドアがあって、次の部屋は接客室であり、この部屋の右側には両開きドアがあり、これは事例2の廊下に結がる。この廊下を直進したつきあたり左側にこの世帯の台所がある。従って台所はかなり離れているが、自力で改装して、新しいキッチンセットと食卓セットを配置している。なお食事は台所で行っている。接客室奥の部屋は祖母と孫の寝室である。団欒はこの部屋で行う。トイレ、風呂はないので、公衆トイレ、公衆浴場を使う。一般的な部屋の使い方は、夫婦のプライバシーを重視するために入り口から順に接客室、祖母と孫の寝室、夫婦の寝室とするか、祖母と孫の寝室、接客室、夫婦の寝室とするかであると思われる。現在のような使い方になっているのは建物が古いた

め入り口から風が入ってきて、寒いからこの部屋を夫婦が使い、暖かい一番奥の部屋を祖母と孫の寝室にしているとのことであった。住宅の古さや寒さが、夫婦のプライバシーを犠牲にしていることが分かる。祖母はこれからもこの住宅に住み続け、子供に引き継いでほしいと願っている。

〈事例4〉(図4)

家族構成は父(71歳)、母(68歳)の2人家族である。息子は結婚して北京市に住んでいる。息子は大学進学のため北京市内に移住し、その後結婚したそうである。娘も結婚し、本市内に住んでいる。父母とも年金で生活をしている。昼間の過ごし方は父母ともに家で家事をしているか、近所の年寄り達と遊んでいる。この世帯は子供の進学のために別居になっている。

この住宅は1960年ハルビン建築大学に勤める父が大学から借りた住宅である。現在もそのまま借家として住み続けている。家賃は1ヶ月54円である。面積は48㎡である。玄関の間は木造で、壁は木枠のガラスである。2階も住宅とし、別の世帯が居住し、一階は絨毯屋に大学が貸している。この住宅部分は公室、私室、台所、トイレで構成されている。絨毯屋の店を通り抜けるとドアがあり入ると接客室である。床は板張りである。右側は寝室であり、靴を脱いで入っている。主な家具はタンス、テレビ、ソファ、机、ミシン、Wベッドである。団欒はこの部屋で行う。接客室の奥は台所とトイレである。ご飯は毎回母が作っている。洗濯、食器の洗いを全部台所で行う。食事も台所で食べる。風呂がないので、公衆浴場を使う。父母ともにこれからもこの住宅に住み続け、娘に引き継いでほしいと願っている。

〈事例5〉(図5)

家族構成は父(33歳)、母(28歳)、息子(3歳)、息子(3歳)の4人家族である。祖父母は近くに住んでいる。何かあるとき(たとえば息子さんの病气、父が出張するなど)、すぐ祖父母に来てもらっている。父母は本市の亞麻工場で仕事をしている。息子2人(双子)は幼稚園に預けている。

住宅は、1999年4月に本市亞麻工場から買った住宅であり、値段は10万円である。祖父母からの資金で購入したそうである。面積は56㎡である。この住宅はコンクリートと煉瓦造の混構造で、3階建ての集合住宅である。床は板張り、窓は木枠の二重ガラス窓である。この住宅は玄関の間、私室3室、台所、

風呂兼トイレで構成されている。この住宅は古いが、買ってすぐ全面的に改装した(写真参照)ものであり、3階建ての3階部分である。入り口に靴箱があって、そこで靴を脱ぐ。そこは玄関の間であり、ここで折り畳みテーブルと椅子を使って、食事をとる。引き違い戸があって、入ると接客室である。机の上に神棚を祭っている。団欒と接客はこの部屋で行う。玄関の間の右側は父母と息子達の寝室である。次の部屋は客用の寝室である。この部屋の正面は風呂兼トイレである。家族寝室の正面は台所である。食事は父母の両方が作るそうである。父母ともにこれからもこの住宅に住み続け、子供に引き継いでほしいと願っている。

<事例6> (図6)

家族構成は父(38歳)、母(35歳)、娘(12歳)の3人家族である。父の兄は本市内にいる。父の妹も本市内にいる。父と母は本市亜麻工場に勤務、娘は小学生。

住宅は、1945年に祖父の勤めた本市亜麻工場から借りた住宅である。家賃は1ヶ月50元であった。面積は46㎡である。祖父母は父の結婚時にこの住宅を父に譲り、自分達は本市師範大学の宿舎に移り、現在もそこに住んでいる。1990年4月に亜麻工場から5万円で購入した持ち家である。この集合住宅は1913年に建ったものである。この住宅は三階建ての三階にある。住宅の壁はコンクリートと煉瓦造の混構造であり、床は板張りであり、上に絨毯を敷いている。窓は木枠の二重ガラス窓である。この住宅は玄関の間、私室2室、台所、トイレで構成されている。事例5の隣にある。この世帯も住宅購入時に全面改装したそうである。

入り口から靴を脱いで入るとすぐに玄関の間である。玄関の間は冷蔵庫と電子レンジを置いている。食事は玄関の間で食べる。床は板張りであり、上に絨毯を敷いている。玄関の間から右に入ると、父母の寝室である。同様に床は板張りであり、上に絨毯を敷いている。壁はビニールクロス、天井の中央にシャンデリアがある。団欒と接客はこの部屋で行う。玄関の間の突き当たりにドアが二つあり、右側のドアから入るとトイレであり、中に洗濯機も置いている。隣のドアを入ると台所である。なお母が毎回食事を作る。玄関の間の左側に入ると娘の寝室である。床は板張りであり、上にホットカーペットを敷いている。風呂がないので、公衆浴場を使う。起居様式はイスザである。

父母ともこれからもこの住宅に住みつけ、子供に引き継いでほしいと願っている。

<事例7> (図7)

家族構成は、父(47歳)、母(43歳)、息子(16歳)の3人で、父の弟は本市内に、父の姉も本市内にいる。昼間の過ごし方は、父は本市亜麻工場に勤めており、母は隣の住宅で私設幼稚園の園長の仕事をしている。この幼稚園は40人ぐらいの子供を預かっている。息子は高校生。

この住宅は1996年12月に、父の勤めた本市亜麻工場から借り、それを2000年1月に購入したものである。値段は12万円であり、面積は56㎡である。この集合住宅は1913年に建ったものであり、この住宅は3階建ての1階部分にある。住宅の壁はコンクリートと煉瓦造の混構造である。床は板張りである。窓は木枠の二重ガラス窓である。この住宅は私室4室、台所2、トイレ2で構成されており、事例5、6の住宅の隣に位置する。なおこの住宅は改装していない。入り口から入ると、左側に靴箱があり、右側に長椅子があって、その上には上着、帽子などを置いている。左側の個室には9台の二段ベッドを置いており、子供たちの昼寝用である。一番奥の教室に机、ピアノなどを置いている。幼稚園の子供たちが勉強するときに使っている。食事はこの部屋で食べる。この個室の正面はトイレである。トイレは洋式便器で洗面台もあわせて設置している。トイレの隣りは台所である。幼稚園の子供たちの食事はお手伝いさんが作っている。現在、隣の住宅も購入し、現在改装中である。面積は56㎡である。現在、そのうちの1室だけを子ども達の教室として使っている。完成したら、父母、息子はこの住宅に住む予定である。現在は、幼稚園児達が帰宅した後の部屋を居住用にも使っている。父母とも、これからもこの住宅に住み続け、子供に引き継いでほしいと願っている。

<事例8> (図8)

家族構成は父(68歳)、母(67歳)、息子1人、娘3人の6人の家族である。4人とも結婚して、本市内にいる。今は父母2人だけでこの住宅に住んでいる。2人とも退職して、年金で生活をしている。昼間の過ごし方は、近隣の年寄りたちと一緒に遊んでいるか、家事をしているかである。

この住宅は1956年に父の勤めた本市亜麻工場から借りた住宅である。家賃は1ヶ月50元であり、面積は48㎡であった。それを1995年本市亜麻工場から7

万円で購入した。この集合住宅は1913年に建ったものである。この住宅部分は3階建ての2階部分である。住宅の壁はコンクリート、床は板張りである。窓は木枠の二重ガラス窓である。この住宅は玄関の間、私室1室、公室1室、台所、トイレで構成されており、改装はしていない。入り口から靴を脱いで入ると玄関の間である。玄関の間は冷蔵庫、もの入れを置いている。左側は寝室である。寝室の奥の部分は接客室として使っている。団欒はここでやる。接客室の正面は台所である。母が毎回食事を作る。食事は台所で食べている。台所の隣りはトイレである。トイレは洋式便器で洗濯機とシャワーをあわせて設置している。父母とも、これからもこの住宅に住み続け、子供に引き継いでほしいと願っている。

〈事例9〉(図9)

家族構成は父(75歳)、母(68歳)、息子3人、娘1人の6人家族である。息子は3人とも結婚して本市内にいる。娘は日本で働いている。この住宅に今は父母2人で住んでいる。父母は年金で生活している。昼間の過ごし方は、父は病気で、家でテレビを見ているか、本を読んでいる。母は父の看病をするか、家事をしている。

この住宅は、1966年に父の勤めたハルビン建築大学から借りた住宅であり、家賃は1ヶ月40円である。面積は50㎡である。この住宅は2階建ての2階部分である。壁はコンクリートと煉瓦の混構造であり、床は板張りである。窓は木枠の二重ガラス窓である。この住宅は玄関の間、公室1室、私室1室、台所、トイレで構成されており、この住宅は改装してない。玄関から靴を脱いで入ると、接客室である。この部屋は息子たちが帰って来るときに使う。接客室の奥は台所であり、洗濯は台所でしている。台所の奥はトイレである。接客室の正面は寝室である。玄関の間は倉庫として使っている。

食事は毎食母が作り、接客室に折畳式テーブルを置いて食べている。風呂がないので、公衆浴場を使っている。起居様式はイスザである。父母ともこれからもこの住宅に住み続け、子供に継いでほしいと願っている。

〈事例10〉(図10)

家族構成は父(73歳)、母(66歳)、娘一人、息子3人の6人家族である。4人とも結婚して、本市内にいる。この住宅は、現在、父母2人で住んでいる。父母とも年金で生活をしている、昼間の過ごし方は、

近隣の年寄り達と遊んでいるか、家事をしている。娘、息子達は週末に時々孫達を連れて帰ってくる。

この住宅は1975年に父の勤めていた国営鉄道から借りた住宅である。家賃は現在1ヶ月65円である。面積は50㎡である。これは1908年に建った聯戸式住宅である。庭がついている。玄関は木造で、住宅の壁はコンクリート、煉瓦造である。床は板張りであり、窓は木枠の二重ガラス窓である。この住宅は台所、私室1室、公室2室で構成されており、改装はしていない。

敷地は木柵で囲まれている。玄関から入ると台所である。母が毎回食事を作る。台所の奥は父母の寝室である。入り口で靴を脱いで入っている。団欒、食事、接客等主要な生活行為は全部この部屋で行う。寝室の奥は個室である。息子や娘夫婦達が帰ってくるとき、この個室を使う。一番奥にある部屋は孫達が帰ってくるとき使う。トイレ、浴室はないので、公衆トイレ、公衆浴場を使う。起居様式はイスザである。父母ともこれからもこの住宅に住み続け、子供に引き継いでほしいと願っている。

〈事例11〉(図11)

家族構成は祖父(79歳)、祖母(82歳)、父(49歳)、母(48歳)、孫(20歳)の5人家族である。祖父母とも退職して、年金で生活をしている。昼間の過ごし方は近隣の年寄り達と遊んでいるか、家事をしている。父と母は国営鉄道で働いている。孫はハルビン市商学院生。

住宅は1957年に祖父の勤めていた国営鉄道から借りた住宅であり、家賃は現在1ヶ月102円である。面積は82㎡である。この聯戸式住宅は1901年に建ったものである。敷地は木柵で囲まれており、門から入ると庭である。玄関の間は木造で、壁には木枠のガラス戸がついている。玄関の奥部分は寝室2室、台所、トイレで構成されており、壁はコンクリートと煉瓦造の混構造である。床は板張りであり、この住宅は改装していない。

入り口から入ると玄関の間である。床は板張りである。玄関の間は広いが、物であふれている。この奥のドアから入ると廊下である。一番目の部屋は祖父母の寝室である。二番目の部屋は父母の寝室である。一番奥はトイレと台所である。祖母が毎回食事を作る。団欒、食事、お客さんが来るときの対応はすべて全部玄関の間で行っている。風呂がないので、公衆浴場を使う。起居様式はイスザである。祖父母とも新築住宅に引越したいと願っている。

〈事例12〉 (図12)

家族構成は父(57歳), 母(56歳), 娘(32歳), 息子(28歳)の4人家族である。娘は結婚して, 本市内にいる。父母とも退職している。昼間の過ごし方は父母で店を経営している。息子も一緒に店をしている。

この住宅は1971年に父の勤めていたハルビン国営鉄道から借りた住宅である。現在, 家賃は1ヶ月100元であり, 面積は55㎡である。この聯戸式住宅は1910年に建ったものである。住宅の壁はコンクリート, 煉瓦造の混構造であり, 床は板張りである。窓は木枠の二重ガラス窓である。この住宅は現在店として使っている。店は2部屋(私室)と台所で構成され, 現在私室2室は店(つまり食堂)となっている。入り口から入った食堂は1997年に増築したものである。奥は台所である。右側から入るとさらにもうひとつの店(食堂)がある。テーブル4台を置いて現在は食堂(店)としている。なお息子は近くのアパートに住んでいる。父母とも早く新築住宅に引っ越したいと願っている。

〈事例13〉 (図13)

家族構成は父(68歳), 母(67歳), 娘2人, 息子1人の5人家族である。娘2人と息子1人の3人とも結婚して, 本市内にいる。父母とも退職して, 年金で生活している。昼間の過ごし方は近隣の年寄り達と遊んでいるか, 家事をしている。

この住宅は父の勤めた国営鉄道から借りた住宅である。家賃は1ヶ月100元で, 面積は100㎡であり, 1933年に建ったものである。玄関の間は木造の張り出しである。住宅の壁はコンクリートと煉瓦造である。床は板張りであり, 窓は木枠の二重ガラス窓である。この住宅は玄関の間, 私室1室, 公室1室, 台所, トイレで構成されており, この住宅は改装していない。

入り口から入ると, 玄関の間である。食事は玄関の間で食べる。玄関の間の奥は廊下である。廊下の左側に冷凍庫を置いている。左側のドアから靴を脱いで入ると, 父母の寝室である。廊下の奥は接客室であり団欒はこの部屋で行う。接客室の奥はトイレである。トイレは洋式便器で洗面台と洗濯機をあわせて設置している。トイレの右側は台所である。母が毎回食事を作る。風呂がないので公衆浴場を使う。起居様式はイスザである。父母ともこれからもこの住宅に住み続け, 子供に引き継いでほしいと願っている。

〈事例14〉 (図14)

家族構成は父(69歳), 母(66歳), 息子2人の4人家族である。息子2人とも結婚して, 本市内にいる。父母は退職して, 年金で生活をしている。昼間の過ごし方は近隣の年寄り達と遊んでいるか, 家事をしている。

この住宅は1975年7月20日父の勤めた国営鉄道から借りた住宅である。家賃は1ヶ月90元であり, 面積は50㎡である。これは1910年に建った聯戸式住宅である。庭がついており, 玄関の間は木造で, 住宅の壁はコンクリートと煉瓦造である。床は板張りであり, 窓は木枠の二重ガラス窓である。この住宅は台所, 風呂兼トイレ, 玄関の間と私室1室で構成されており, この住宅は改装していない。

敷地は鉄柵で囲まれている。門から入ると庭である。入り口から入ると玄関の間である。物をたくさん置いて, 倉庫として使っていることが分かる。玄関の間の奥は廊下である。廊下の中央にペチカが設置されている。廊下の右のドアから入ると台所である。母が毎回食事を作る。台所の隣は風呂兼トイレである。バスと洋式便器を合わせて設置している。廊下の左のドアから入った部屋は倉庫となっている。普通はこの部屋は接客室である。現在は接客は父母の寝室で行っている。一番奥の部屋は父母の寝室である。団欒, 接客, 食事の全部をこの部屋で行う。起居様式はイスザである。父母ともこれからもこの住宅に住み続け, 子供に引き継いでほしいと願っている。

〈事例15〉 (図15)

家族構成は父(66歳), 母(60歳), 息子(32歳), 息子の妻(30歳)の4人家族である。父母とも年金で生活をしている。昼間の過ごし方は近隣の年寄り達と遊んでいるか, 家で家事をしている。息子夫婦は家で裁縫の仕事をしている。

この住宅は1967年父の勤めた国営鉄道から借りた住宅である。現在, 家賃1ヶ月200元である。面積は40㎡である。この住宅は1908年に建った聯戸式住宅である。住宅の壁はコンクリート, 煉瓦造である。床は板張りである。窓は木枠の二重ガラス窓である。この住宅は台所, 私室2室で構成されており, 改装していない。入り口から入ると台所である。母が毎回食事を作る。台所の右側は父母の寝室である。主な家具はタンス, テレビ, 棚などである。団欒はこの部屋で行う。寝具はかん(温突)というベッドである。かんがキッチンの竈と一体化しているもので

あり、このかんは中国人が住んでから自分達で作ったものである。台所の左側の部屋は息子夫婦の寝室である。トイレと風呂がないので、公衆トイレ、浴場を使っている。起居様式は胡座とイスザである。家族は新築住宅に引越したいと願っている。

〈事例16〉 (図16)

家族構成は父(73歳)、母(70歳)、息子(43歳)、息子の妻(39歳)、孫(15歳)の5人家族である。息子には姉(46歳)、次姉(46歳)、妹(40歳)の姉妹がいるが3人とも結婚して別の住宅に住んでいる。長女と妹は日本の広島にいる。次姉は本市内にいる。父母とも退職し、年金で生活をしている。昼間の過ごし方は近隣の年寄り達と遊んでいるか、家事をしている。息子夫婦は国営鉄道に、孫は中学校に通っている。

この住宅は1960に年父の勤めた国営鉄道から借りた住宅である。現在、家賃は1ヶ月65円である。面積は82㎡である。この住宅は1910年に建った聯戸式住宅である。住宅の壁はコンクリートと煉瓦造である。床は板張りであり、窓は木枠の二重ガラス窓である。この住宅は私室2室、公室1室、台所で構成されており、台所と寝室は、自分で既存の住宅の前面部分に増築したものである。又去年住宅内も改装した。入り口から入ると廊下である。左側は台所である。母が毎回食事を作る。右側は父母の寝室である。寝室に入るときは履き替えをしている。寝室の右側はトイレである。廊下の突き当たりからロシア人の建てた住宅である。ドアから履き替え入ると接客室である。孫はこの部屋で寝る。団樂と食事はこの部屋で行う。接客室の右側は息子夫婦の寝室である。風呂がないので、公衆浴場を使う。起居様式はイスザである。父母ともこれからもこの住宅に住み続け、子供に引き継いでほしいと願っている。

〈事例17〉 (図17)

家族構成は父(60歳)、母(60歳)、長男(30歳)、次男(28歳)の4人家族である。昼間の過ごし方は父が学校で先生の仕事をしている。母は退職した。近隣の年寄り達と遊んでいるか、家事をしている。長男は貿易会社に勤務、次男は工場仕事である。

この住宅は1958年父の勤めた学校から借りた住宅である。この住宅は1910年に建ったものである。現在、家賃1ヶ月70円である。面積は46㎡である。この住宅は聯戸住宅である。住宅の壁はコンクリート、煉瓦造である。床は板張りであり、窓は木枠の二重

ガラス窓である。この住宅は台所、私室2室、公室1室で構成されており、この住宅は改装してない。

入り口から入ると玄関である。玄関から入ると台所である。洗濯物は台所でしている。母が毎回食事を作る。台所の右側は次男の寝室である。寝室兼倉庫として使っている。台所の奥は父母の寝室である。団樂と食事、接客はここで行う。台所の奥にあるにも関わらず接客までも寝室と重なっている。寝具はかん(温突)というベッドである。一番奥の部屋は長男の寝室である。この部屋に入るときは靴を脱いでいる。トイレと風呂がないので、公衆トイレ、浴場を使う。起居様式は胡座とイスザである。

父母ともこれからもこの住宅に住み続け、子供に引き継いでほしいと願っている。

4. まとめと考察

当初の問題意識に即して、事例の考察をまとめることで結論とする。

調査した住宅はすべて最初は単位(勤務先の呼び名)から借りた住宅であったが、途中で3軒が持ち家に、残りは借家のままである。なお借家期間は50年近い世帯がほとんどであり、かつ世代がかわっても返却しないで住み続けていることが大きな特徴である。調査した17例の延べ面積については、平均面積が60㎡弱とかなり狭い。大半がコンクリートと煉瓦の混構造であり、窓は木枠製で二重のガラス窓、真ん中に木の屑を4分の1程度入れて、防寒対策をしている。

家族員数は2~5人、核家族が多いが、3世代(老親、若夫婦と子ども)が3例ある。3例とも老親と子供世帯が一緒に住んでおり、いわゆる長男同居である。大家族制の名残があり、財産や借家権も更に一部には就業先さえ長男を通して継承されている。

すべての事例で夫婦の寝室は確保されている。さらに、結婚した息子、娘や親戚などが帰省した際に使用するための部屋として日常的には空いている部屋を確保している例が4例あった。今日の中国では家具類を捨てることはほとんどないため、倉庫の要求はきわめて高い。事例10は使用頻度の高い居間兼接客室を、父母の寝室とも兼用している。そして、息子や娘夫婦達が帰ってくる時の寝室(つまり使用頻度は極めて少ない)を別に確保している。この点については、就寝にベッドを使うことが大きく影響していると思われる。帰省する子供達のためにベッドは必要品であり、ベッドがあると、部屋が占領さ

れてしまうため他の用途に使いにくい。部屋数に余裕がなくても、ベッドを置いた空き部屋を倉庫兼帰省部屋として確保し、その結果接客室と寝室が兼用になるという悪循環がある。

事例2, 3の住宅は、建設当初はロシア人の1家族が住んでいた。同じ住宅に増築なしに現在5家族が住んでいる。このため1家族あたりの住宅は極めて狭い。この狭さも一因であるが、父母の寝室で食事をする例が多いことが次の特徴である。しかし6例中2例は空き部屋があっても父母の寝室で食事をしていることから、日本のように食事室と寝室は明確に分けるといいうまい方が必ずしも存在しないといえよう。また寝室で食事をしていない世帯では、炊事場ではなく、玄関の間を利用している点も特徴である。また外食は少なく、食事は毎食作っている。

17例中4例が、幼稚園、食堂、絨毯屋、洋裁屋の兼用住宅であったが、夜になると家族のための空間として利用され、商業空間から住宅へと変化する。

ほとんどの事例においてテレビ、冷蔵庫、洗濯機、棚、タンス、椅子、テーブル、ベッドが所持されている。

イスザであることから家具の設置が固定するが、折り畳みのテーブルやイスを用いることによって、家具の転用性を確保する例もしばしばみられる。また寝室における団欒や接客の際にベッドがソファ代わりに使われることも多かった。暖房についてみると、クーラー付きの空調は1事例だけであり、大半は暖房機能だけのスチームであった。2事例はかん(温突)を使って、採暖する。

17例の中で14例に風呂がなく、公衆浴場を使う。狭いため、風呂を設置しなかったためである。事例17は台所左側の個室は当初浴室だったが、入居した中国人は浴室としては使わず、現在は寝室になっている。中国の東北地方は、冬は寒いので風呂がある家庭でも多くは公衆浴場を使っている。自宅の場合、設備の水準が低く十分な温度のお湯が出ない、或いはスチームと一緒に設備でお湯を入浴に使うか、電気温水器を使ってお湯を別個にわかすかである。ガスを使ってお湯を沸かす設備は17例の中で1例もなかった。

17例中7例はトイレがなく、公衆トイレを使っている。寒い冬に戸外の公衆トイレを利用することは極めて不便であると考えられる。水とガスが設置されたいわゆるキッチンセットは17例の中で5例(3, 5, 6, 8, 16)が持っている。これは自分たちで新た

に、キッチンセットを購入し設置したものである。キッチンセットを持たない世帯とは、上水道は全世帯に普及しているが水道管の下に簡易流しが置かれそれとは別に、プロパンガスボンベとコンロが置かれているものである。コンロは中国東北地域の一般的な炊事熱源であるとともに、冬の暖房設備も兼ねている。調理台として机などを置いている世帯もあった。下水道は5例にあった。

17例の中で3例はかなり大がかりな改装をしていたがその他はほとんど手を入れていない。生活改善の動きがまだ居住条件の整備には至っていないといえる。特に家具による混乱は生活行為そのものへのしわ寄せとなり大きな問題である。狭さが原因と考えられる様々な問題を抱えながら、生活行為を一室で重ねることで住みこなしているといえる。更に古さが要因の問題も大きく生活行為に影響している。中でも調査した17例の住民にとって困難な問題は下水道、トイレ、浴室、暖房設備などの設備関係の不備である。

最後に今後の課題について述べる。本研究はハルビンにおけるロシア様式住宅の就寝や食事、団欒を中心とする生活行為が、狭い住戸の中でどのような優先順位を持って確保されてきたのか、設備や家具の保有はどうであったかを明らかにした。そこで今後はロシア人がそのまま住み続けている場合に関してもみていく必要があると思われる。

謝 辞

最後に、研究活動の手助けをして下さった研究室の院生・学生の皆さん、更に調査に応じていただいた対象者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 侯幼彬, 張復合, 村松伸, 西澤泰彦主編: 中国近代建築総覧(ハルビン篇)
- 2) 西澤治彦: 中国, pp148~149, pp268~269
- 3) 王曙光編: 現代中国, pp219, 1998
- 4) 劉敦縉: 中国の住宅, 1976
- 5) 瀬保子, 王勝今編訳: 中国の都市人口と生活水準, p 7, pp182~195, 1994
- 6) 住田昌二著: 現代住まい論のフロンティア, pp185~192, 1985
- 7) 重村 力: 初期里住宅における空間と住まい方の変容: 中国上海里に関する研究 その1, 日本建築会計画系論文報告集 pp75~83, 1992
- 8) 地球の歩き方(中国), pp437~440, 1995



事例 2



事例 4



事例 5, 6 の外観



事例10

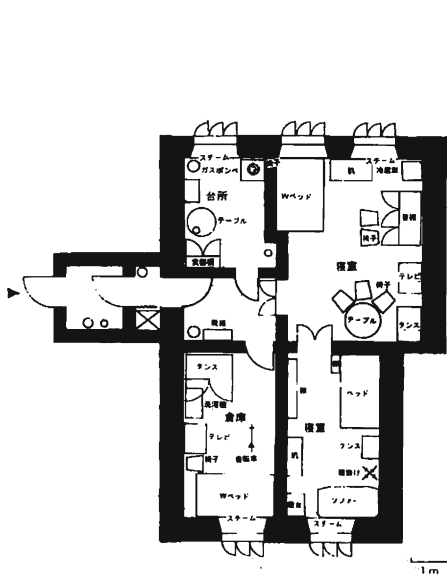


図 1 事例 1

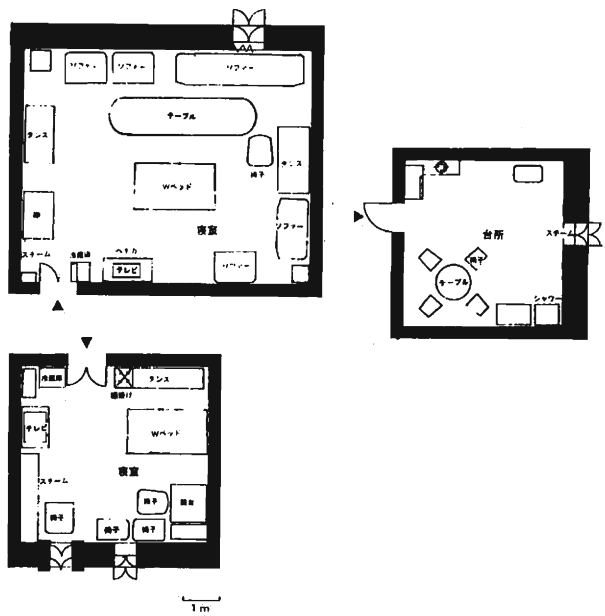


図 2 事例 2

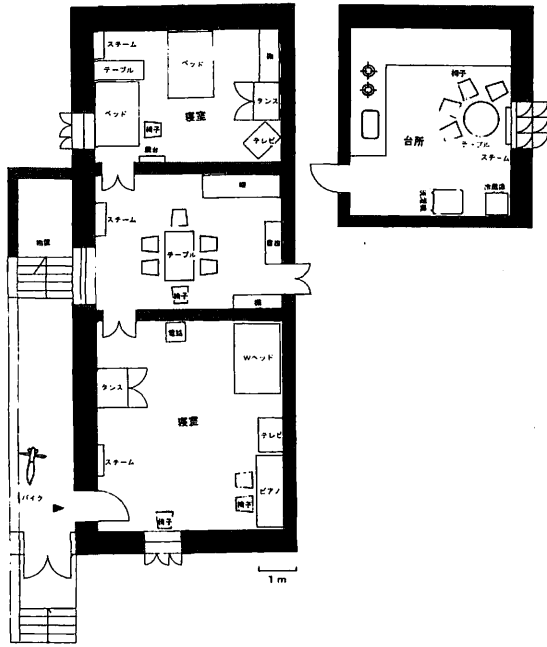


図3 事例3

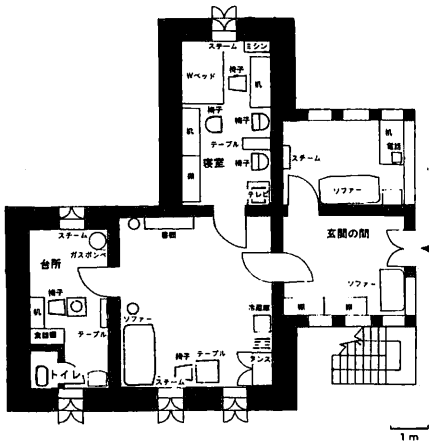


図4 事例4

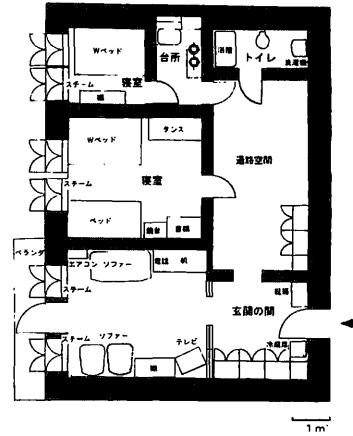


図5 事例5

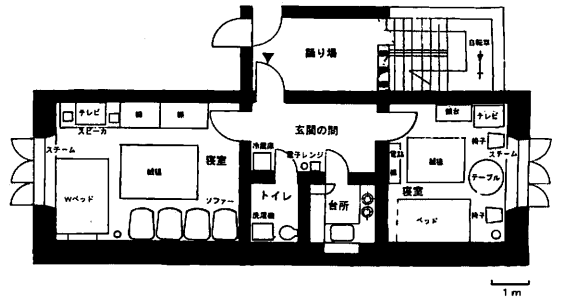


図6 事例6

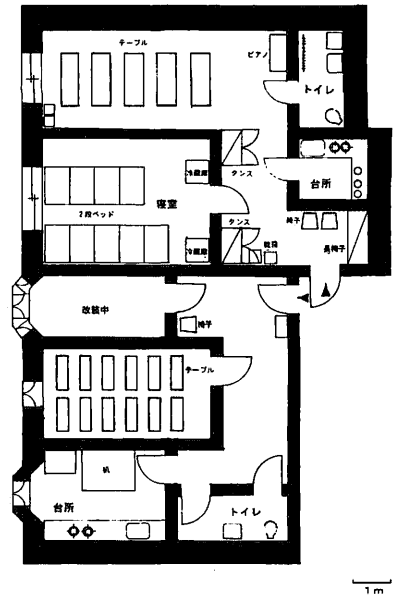


図7 事例7

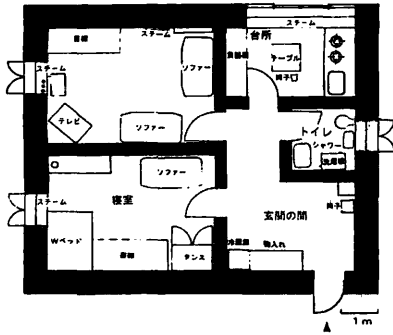


図8 事例8

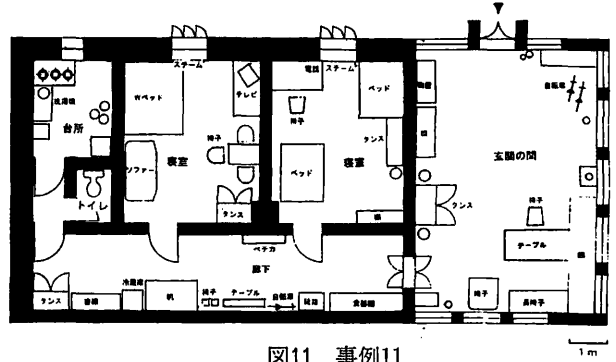


図11 事例11

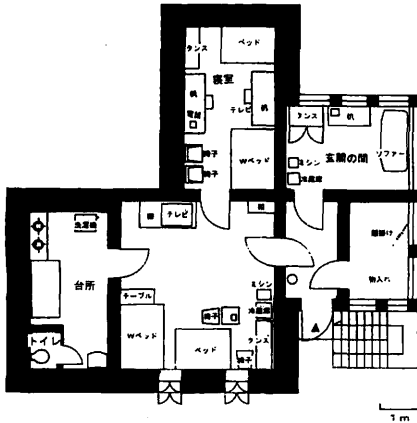


図9 事例9

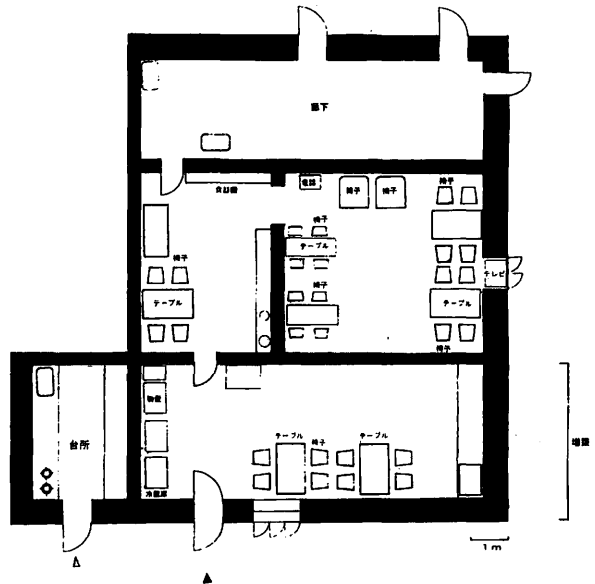


図12 事例12

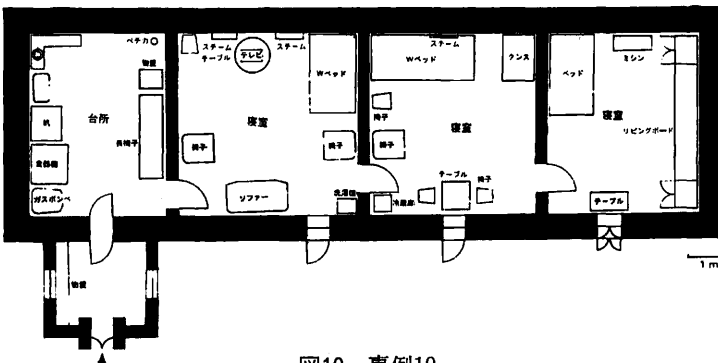


図10 事例10

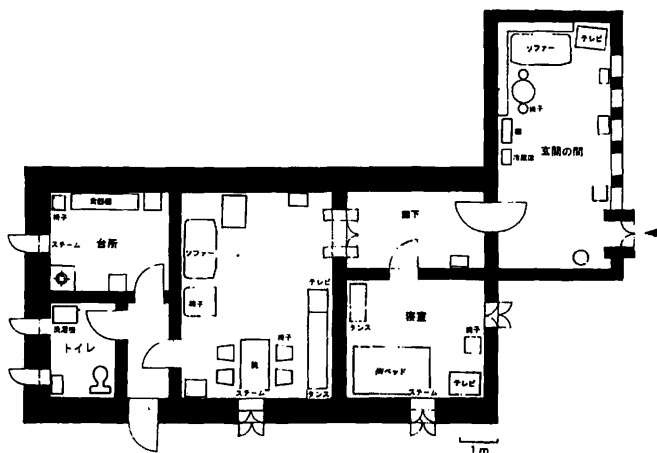


図13 事例13

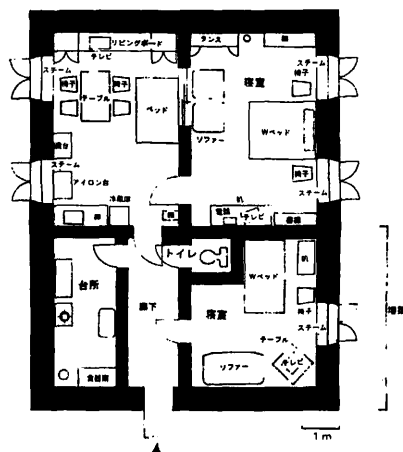


図16 事例16

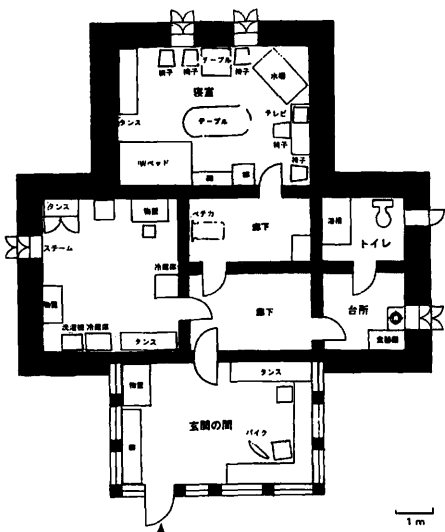


図14 事例14

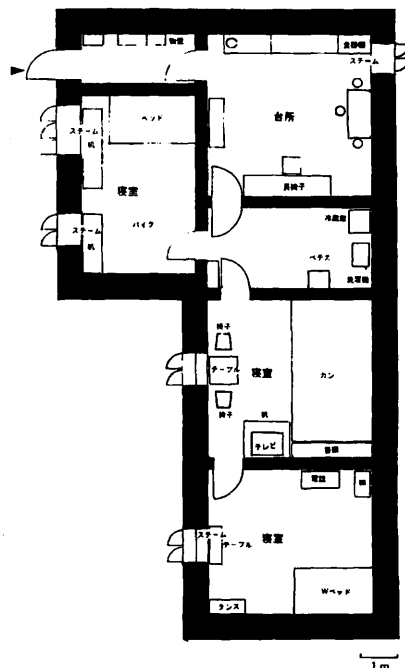


図17 事例17

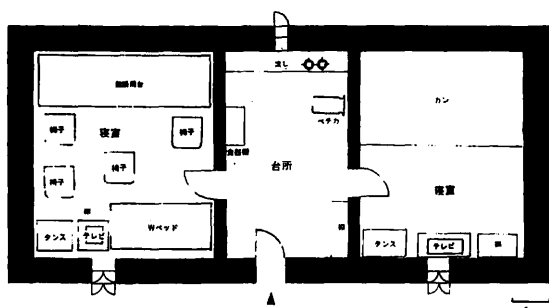


図15 事例15